

夙川ブロックと明石教会堅信式

いつくしみのあかしびと キリストとともに働く者

4月11日(日)、神のいつくしみの主日に夙川ブロック(夙川教会と芦屋教会)で17人の堅信式が行われた。晴天に恵まれた2年ぶりの堅信式。大きな喜びに包まれた。次週の4月18日(日)、明石教会では9人の堅信式が行われた。コロナ感染予防対策を徹底した静かなミサだったこともあり、緊張と静寂の中で行われたが、参加者は皆感動した。

二週続けて司式した前田万葉大司教は、受堅者らに堅信の秘跡をこう説明した。「堅信式では、洗礼の時に受けたキリストの霊をより力強く授けられ、その十字架の印を香油で額に印されます」「求められる使命が大きくなり、それに匹敵する聖霊を与え



夙川ブロック堅信式

られるということです」「堅信を受ける人達には過去のことはすべて赦し、『あなた方に平和があるように』といういつくしみを示す使命があります」「大人の信者としての自覚を持ち、キリストと共に働く者になりなさい」。

受堅者らに送った歌の一つは「仕合わせになれ受堅者よ樫若葉」。仕えることによって大切な人に大切にされる、そういう仕合わせを願う気持ちと、堅い樫の木のように堅い信仰——『堅信』をもって将来の教会を担ってほしいという希望と期待を込めた。

夙川教会高校生受堅者の感想▶「僕の受堅は同い年の皆より遅かったです。でも、僕は僕の信仰について悩み抜き、考え抜いた結果、イエス様の教えに従い生きていく覚悟を持ってこの堅信式に臨めたことをとても良かったと思います」。

明石教会主催者のコメント▶「あらかじめ限定した明石教会の地区(Cブロック)のみの信者の参加でしたが、もっと多く(明石教会全体)の信者と共にお祝いをしてあげたかったです。大阪、兵庫でコロナ感染者数が大幅に増え続けている渦中に、前田万葉枢機卿様をお迎えして堅信式が行えたことは『奇跡』に思えました」。



明石教会堅信式



聖ヨセフとわたし

聖ヨセフ年(今年12月8日まで)を記念し、霊名がヨセフの司牧者に聖ヨセフにちなんだものの紹介や個人的な気づきをシェアしていただく。

ヨセフのもとへ行け

そめの はるお 染野治雄神父(御受難会)

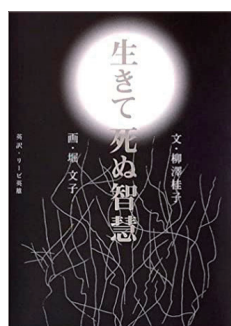
「ヨセフ」の洗礼名をどうして私がいただいたのか、今となっては知ることはできませんが、私に洗礼を授けてくださったヨセフ・フーゲントブレル神父様(ベトレヘム外国宣教会)の名前をいただいたのかもしれない。そんな私が50年も後に司祭になったのですから、神父様もさぞ驚かれたことと思います。そしてうれしいことに、叙階式に来ていただくこともできました。その後、ヨセフ神父様はスイスへ帰国し、2013年に帰天されたと聞きました。

創世記のヨセフ物語では、エジプトへ奴隷として売られたヨセフがイスラエル民族の祖として、イエス様へつながる道筋を準備しました。ヨセフは言いました。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変えて(創世記50・20)くださったと。フランシスコ教皇様も『使徒的書簡 父の心で』で、「ヨセフのもとへ行け」(創世記41・55)の言葉を引いて、困難のときの導き手としてのヨセフ様に言及しています。

ヨセフ様にならい、わたしたちもすべてを善に変えてくださる神の力を信じて、困難なときを助け合い乗り越えて行くことができますように。



筆者、2008年の叙階式でヨセフ・フーゲントブレル神父と



春名昌哉神父から
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は春名昌哉神父様(堺教会)が担当。



『生きて死ぬ智慧』(柳澤桂子著、小学館、2004年、税込1257円)

コロナ禍の終息のきざしが見えず、社会は大きな不安に包まれています。連日感染者数や死者数、医療体制の逼迫などが報道され、この一年の間に3度の緊急事態宣言が出され、わたしたちの生活は一変することになりました。感染拡大を避けるため、三蜜を避けることが推奨され、人と人が会うことが難しい状況が続いています。緊急事態宣言発令中は公開のミサをすることもできず、勉強会や病者訪問も中止されたままです。しかし、そのような今であるからこそ「人間とは何か」「いのちとは何か」が問われているのだと思います。

わたしが本書を知ったのは、神学生時代のことで、当時、夜眠れないときによくラジオの深夜放送を聞いていたのですが、とある番組の中で本書が特集されていました。「般若心経」というお経について名前がよく知っていましたが、内容はさっぱりわからなかった。もちろん今でもわかっていないわけではありませんが、本書との出会いはそれまで退屈で難しいと思っていたお経を、ほんの少し、わたしに近づけてくれたと思います。

カトリック時報でお経の紹介?と思われる方も多いでしょう。カトリックの信仰に何か役に立つのか?とも感じる方もおられると思います。しかし、仏教もアジアで、また日本でも古くから信仰されてきた宗教です。わたしは本書と出会うことで、神様について東洋的なものの中から学ぶことも多いと感じています。著者は、難解な「般若心経」を自身の科学的な解釈を加えた美しい言葉で翻訳されています。わたしもそうですが、すぐに理解できるものではありません。しかし、何度も読み返していると、人生の岐路に立ったときにその意味を少しずつ理解していくと思います。もちろん聖書は大切ですが、たまには違う体験も信仰を考えるために役に立つと思います。

「般若心経」をキリスト者の視点で読むのも興味深いものです。ぜひ読んでみてください。

今回は、上田憲神父様(かわちブロック主任・大阪セミナー・ピアンネ館)です。